

ホトトギス

昭和二十四年三月二十六日運輸省特選授水産雑誌第六二七号  
平成三十年八月一日発行(第百二十一卷第八号)

# ホトトギス

八月号



## 風雅の小筈〔八〕

廣 太 郎

平成二十一年三月七日から四月十九日まで、横浜にある県立神奈川近代文学館に於いて、虚子没後五十年を記念して「子規から虚へ―近代俳句の夜明け―」と題された企画展が行われたのを御記憶の方も多いだろう。芦屋の公益財団法人虚子記念文学館所蔵の虚子の遺墨簿を多く展示して、多くの方に御来館頂いた。展示だけではなく、色々なイベントも行われたが、その中で、不肖私もパネラーの一人として参加させて頂いた「虚子の客観写生」という内容のシンポジウムが行われた。虚子は生前客観と言ったり、主観の大切さを反対に説いたりして、何か取り付く島の無い一面もあるのではないかと色々な意見が交わされたが、結局これといった結論は出なかった。勿論この問題は奥が深く、一朝一夕に答が出る事がないのは当然であるが、私もこの時以来、客観写生については、自身の勉強不足も相俟つて暫く考えを棚上げしてきたが、ある日ある会で、公益社団法人日本伝統俳句協会副会長である大輪靖宏先生が講演をされ、虚子著『俳句への道』の一節を引用された。

私は敢て客観写生ということを言う。それは、俳句は客観に重きをおかねばならぬからである。(中略)その客観写生ということにとに努めて居ると、その客観描写を透して主観が浸透して出て来る。作者の主観は隠そうとしても隠すことが出来ないのであつて客観写生の技倆が進むにつれて主観が頭を擡げて来る。

この文で目から鱗であつた。皆様はどうお感じになられるだろうか。

# 句日記 汀子

平成二十九年八月六日 下朝句会

星月夜三瓶の旅も終りけり  
近づいてゐる台風と知つてをり  
水音の涼しさに居て折りあり  
冷房に居ること忘れゆきにけり  
忘れてはならぬ墓参と思ひつつ

八月七日 ロイヤル俳壇

忘れ得ぬものの一つに阿波踊  
立秋と思へぬ荒き一日かな  
颱風の予報に油断なかりけり  
新涼にとどこほりなきスケジュール

八月八日 大阪倶楽部

朝顔に昨日と今日と明日のあり  
蜘蛛につづる山莊物語  
神戸港開港記念大花火  
待つ人出閣を抱きて揚花火

新涼の旅の昨日のはや遠し

早寝せしこと悔まるる花火の夜

新涼の風にゆだねし稿債も

八月八日 綿業倶楽部

新涼の往復切符ポケットに  
今日も又心の中の墓参かな

新涼の旅疲れとはなかりけり  
八月十日 清交社  
山莊の滞在長し法師蟬

新涼と思へば耐へて行くことも  
残暑なき二十四階へと着きぬ  
気にかかる消息聞きぬ法師蟬  
稿一つ仕上げ涼しき家居かな

誰彼の恙の話聞く残暑

八月十五日 有恒俳句会

新涼をもたらせし雨ならばとて  
雨止みしこと秋の蟬告げてをり  
咲きしこと木槿の一日はじまりぬ  
進みゆく季節新涼身ほとりに

雨止みて新涼の朝はじまりぬ

八月十五日 無名会

一と雨に秋めく朝となつてをり  
朝の雨止み新涼の客を待つ  
雨止めば秋めく心消えはじむ  
これまで墓参三十三回忌

八月十六日 夏潮句会

流星に今宵の夜空明け渡す  
醉芙蓉とて朝の間の過ぎ易く  
米国へ旅立つ友に秋涼し  
新涼の雨止みしより集ふ会

白粉の花の蕾の活けられし

流星を見し夜の旅を語らばや

八月十九日 東北ホトトギス俳句大会前日句会

虚子句碑を訪ふみちのくの秋涼し  
みちのくの秋の蟬より旅路あり  
宿失せて句碑の所在を訪ふも秋

八月二十日 東北ホトトギス俳句大会  
爽やかに名前と顔と一致して  
待つといふことも爽やかなる旅路  
この道は奥の細道露けしや

八月二十四日 アネモネ句会

みちのくへ秋めく心置いて来し  
阿波の旅思ひ出したる盆の月  
秋めくや余裕の心生れつつ  
秋めくといふ日待たるる旅心

雨もまた秋めく心いざなへる

病む友に秋めく日々を祈りつつ

八月二十五日 時雨句会

流星の引寄せてみし夜空かな  
身ほとりにありて秋扇なりしかな  
山深く来て蜘蛛と夕風と  
蜘蛛に山莊閉ぢる日も近し

雲退かぬ流星の夜となりけり

湿布張り終へて使へる秋扇

八月二十六日 ホトトギス社吟行会

秋扇をさめて一步会場に  
静雲の縁の寺を訪ふも秋  
稿債を抱へ来しこと秋暑し

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十九年八月三日 蕉心会

下町に響くエンジン音 晩夏  
涼風に 鷗の 声の裏返る  
直線に 曲線に 水尾秋近し  
タクシーは 船にもありて 水尾涼し  
鳩飛んで 魚跳んで 海猫昼寝かな  
今年竹親の 背中を見て 育つ  
咲くものを 秘め 記念館茂りたる  
夏館 壁と 太陽 閑ぎ 合ひ

八月四日 カトリック新聞選者時

籐椅子に座して ロザリオ 繰る 漢

八月五日 鬼貫顕彰俳句大会

熊蟬を聞けば 故郷近付ける

八月六日 野分会芦屋例会

草市の 立てば 喪心 里心

木槿垣端より 目覚めゆく 寺院

盆の市立つや 五山に見守られ

底紅を塗り替へて ゆく 羽音かな

八月六日 青嵐会芦屋例会

つまべに 君の心を 染め上げて

踊見の背が 疼いてをりにけり

八月七日 朝日カルチャー若草句会

初秋や 水は 明日へ 流れゆく

大阪の 三十八度 残暑

新涼の 風は 昨日を 遠ざけて

鳴くものの 声を 吸ひ込む 残暑かな  
夜は 星に 命預けて 花木 榿

八月九日 「俳句」創刊二十五周年記念出句

句碑の 文字 弾いき 反りて ありに けり

大屋根の 涼しき 反りて ありに けり

秋近き 風は 下町より 生るる

その中に 命鎮めて 草茂る

滴りを 集め 大川 嵩となる

指先に 魂を 宿せし 踊かな

踊より 戻りし 君の 濡れて ぬる

この 残暑 嵐近付く 気配とも

明日の 無き 木槿は 今日を 使ひ 切り

秋の 蟬一オクタール 高く 鳴く

八月十日 土筆会

文月の 日差 三十七度 かな

文月や 文字に 囲まれたる 生活

昨日とは 違ふ 新涼 纏ふ 園

八月十四日 北國文芸選者時

昨日もう 思ひ出となり 秋涼し

八月十七日 登高会

涙雨 八月 十五日の 首都

不知火や レイテソロモン ミッドウエー

懸煙草 ショートピースに 嵌りし 日

八月十九日 東北ホトトギス同人会、大会

稲の花 指呼に 新幹線 北へ

秋の 蟬みちのくの 風謳歌して

虚子の 文字 解読もして 秋涼し

階段の 一段 毎に 秋涼し

五大堂 新涼といふ 詩心

奥の院より 新涼の 風立ちぬ

八月二十日 若水句会

みちのくへ 鉄路一本 稲の花

星飛ぶや ホルスタ 未発見 スコア

流れ星 夜汽車は アンタレス 通過

三時間 命燃やして 稲の花

東京の 果てに 住み古り 大根 時く

八月二十三日 目黒学園句会

初嵐 都心 縮めて ゆきに けり

一日に 百句を 詠むと 生身 魂

五十六と 酌み交はせしと 生身 魂

草原の 命 醒まして 初嵐

八月二十六日 ホトトギス社吟行会

法師 蟬 静雲 句碑を 震はせて

交差点が 躍つてをりに けり

湘南の 気風 に 触れて 秋暑し

新涼や 静雲 句碑に 出会ふより

八月二十七日 野分会東京例会

草市の 立ちちて 小路といふ 雅

子の 未来 先祖の 過去や 草の市

日を 畳み 風を 畳みて 木槿 落つ

八月二十七日 青嵐会東京例会

その中の つくつく ぼふして 指揮者

秋空を 仕上げて ゆきし タワーの 秀

草の 丈 使ひ 切つたる 赤蜻 蛉

終の 声 放ちて 秋の 蟬 落つる

フェラーリの エンジン 音も 秋めける

八月三十一日 夢二会全国俳句大会前日句会

明日の 忌を 仕上げる 霧として 深し

霧包む 速夜の 宿の 静寂 かな

# 雑詠 廣太郎 選

梅林の日輪として高くあり 熊本 岩岡中正

遠野火の人を孤独にしてしまふ 地に跪きては野火を放ちけり 詳細の知れぬ訃音や涅槃西風 神戸 千原叡子

篆刻に遺る君が意冴返る 白梅や書斎にちらと師の起居 鳥帰り人は水辺に戻りくる 龍ヶ崎 今橋眞理子

みどり児を迎へて一家春めける みどり児の寝顔泣き顔あたたかし 道徳の授業中なり 蠅生る 東京 田丸千種

蠅生れ少し濃くなる町の陰 春星や目抜き通りの乏しき灯 金色の御座船濠に梅の城 神戸 後藤比奈夫

天守閣ついて廻れる梅探る しらうめや白にも濃しといへる白 月遠くおきて修二会の奈良の闇 同 和田華凜

青よりも赤の哀しき涅槃像 浮世絵のくれなるはこれ桃の花

大奥の跡のもの 芽芳しき 東京 大久保白村

足踏みしバレンタインの日のダンス この帰路はロマンスカーで春の夜へ 朝桜時の止まつてゐるやうな のどけしやチョークの線路どこまでも 神戸 涌羅由美

あをぞらに描く曲線 山笑ふ 不自由に挑むりハビリ春の風 リハビリに東風の運んできし吉報 松本 唐澤春城

二刀流翔平 応援春爛漫 初雷のひとつ木霊を引き連れて 城壁の闇へと戻る 寒鴉 神戸 山田佳乃

不折の画ほのぼのとあり鳴雪忌 風起しつつ壇上へ卒業子 同 立村霜衣

春愁が酒を薄めてをりにけり 若蘆の明るさ 鶴塚の暗さ のどかさも亦独り占めしたきもの 香川 湯川 雅

春光や無窮の空を溢れ出し 太陽に向けし炎や牡丹の芽 もてなしか茅葺き屋根を守る 炉火か 長岡 安原 葉

山笑ふ 県境またぐ橋の上 野良猫と睨めつこして山笑ふ 花へ花影置く花の息づかひ 東京 橋本くに彦

乾杯はみな紙コップ花筵 高笑ふ 一座小さな花筵

# 雑詠句評（七月号より）

蔵の戸の古き音たて雛運ぶ

福知山

吉田節子

古く重い音をたてて蔵の戸を開けてその中から雛を取出して飾ったという一句である。土蔵の重厚なぎいと鳴る扉の音が聞える様だ。無理のない自然な表現力は素晴らしいと感じる一句である。（保佳）

古くからある蔵を想像するが、そこに仕舞われている雛も年代の古いものなのであろう。毎年三月三日を迎える毎に仕舞われている雛を出して飾る、そのプロセスに由緒を感じる。大切に仕舞われ、大切に生まれ、大切に飾られている雛の歳月が何とも煌びやかに伝わってくる。（廣太郎）

祖父米寿息子定年孫卒業

東京

大久保白村

もちろん「卒業」だから春。三世代それぞれ人生の区切りが描かれ、それぞれに祝意のこもった、明るくあたたかな、春の一句。それぞれの世代がそれぞれ無事息災に年を重ねることこそ一番の幸福であるという、誰もが納得できるひとつの哲学が、わかりやすく淡々と述べられている。禅語にいう「日々是好日」なのだが、「祖父米寿」「息子定年」「孫卒業」と漢字だけで簡潔に述べられたところにも、飾らない幸福が表現されていて、共感ももてる。（中正）

祖父が米寿ということは八十八歳、父の定年は六十歳か、最近は六十五歳であろうか。そうなると、息子の卒業は年齢から想像すると大学だろうか。そんな事を考えたり出来る楽しみがこの句から出来るだろう。季題の使い方が絶妙で、新鮮な視点も見取る事が出来る。（廣太郎）

天地有情

花子選

春を待つ老の心を老いて知る 神戸 後藤比奈夫  
 口中の燃えたる愛のチョコレート 同  
 鷹の空地球を包み込んでをり 東京 稲畑廣太郎  
 名苑の余白を埋めて小六月 同  
 北国に遠き便りの梅二月 長岡 安原 葉  
 晴つづく北国てふもまだ二月 同  
 君病みて一年が経つ春寒し 相模原 木村享史  
 綺麗好きなりし遺影に春の塵 同  
 初桜明日は月命日なりし 神戸 和田華凜  
 若葉風里に三つ子の生れたる 同  
 大門をくぐれば花の夕心 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 髪に触れ夜の桜を仰ぎみる 同  
 雨 上るより初桜 初桜 神戸 三村純也  
 花ミモザ神戸に似合ふ雨として 同  
 人悼みをれば音立て芹の水 熊本 岩岡中正  
 書きかけの原稿おきて梅見人 同  
 過ぎし日は緋御殿と呼ばれたる 東京 今井千鶴子  
 花は葉となりし吉野よ遥かなり 同

米寿祝ぐカードパリより春隣 神戸 千原叡子  
 高虚子の新作能や実朝忌 同  
 追悼の旅の終りぬ花の雨 東京 山田閨子  
 み吉野の春を深める雨ならん 同  
 近づきし火星へとべる蛍かな 福山 竹下陶子  
 一天を仰げと桐の花咲ける 同  
 忘れたきことのあれこれ土筆摘む 仙台 赤川誓城  
 妻逝きし淋しさに耐へ土筆摘む 同  
 灯を消してなほ水仙はそこにあり 吹田 大橋 暁  
 風花や遊ぶがごとく風に舞ひ 同  
 駅までの道バスの路花の径 東京 高濱朋子  
 啼き交はす声に目覚めて朝桜 同  
 花の径来て花の道花の路 宝塚 水田むつみ  
 花は散り消えざる想ひ深く抱き 同  
 散ることもまづ白梅にはじまりし 熱海 嶋田一步  
 紅梅に散りゆく速さあるといふ 同  
 孀恋にひとり虚子忌を修しをり 群馬 中杉隆世  
 花の日の移ろひ易く移ろひつ 同